

平成29年度第2回岡山市総合教育会議

日時：平成30年1月25日（木）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成29年度第2回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

〔「異議なし」の声あり〕

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めてのご出席となる妹尾教育委員からひとこと頂戴いたしたいと存じます。妹尾教育委員、お願いいたします。

○妹尾委員 昨年12月に任命されました教育委員の妹尾でございます。よろしくお願いたします。

○司会 ありがとうございます。

それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いいたしたいと存じます。市長、よろしくお願いたします。

○市長 皆さん、こんにちは。では早速、次第に沿って議事を進めさせていただきます。

前回の総合教育会議では、教育大綱策定初年度における、これまでの取組状況や、学力や問題行動等に関する全国調査の結果を踏まえた意見交換を行い、特に「家庭学習の充実」と「教職員の勤務負担軽減」について、さらに掘り下げた議論を行っていくことといたしました。本日はこの2点に絞って、今後どのように取り組んでいくのか議論していきたいと思っております。

特にそろそろ平成30年度の予算を確定していかなければならない時期に来ております。予算要求は出揃いましたが、2月の中旬に固めたいと思っております。今日の意見も参考にしながら来年度の予算、整理をしていきたいと思っております。

今回は、引き続き岡山市中学校長会の下村会長、また小学校長会の青木会長、ベネッセコーポレーションの西島さん、梅田さんにご参加をいただいております。

それではまず、協議事項、家庭学習の充実に向けて、資料1-1について教育長から説明をお願いいたします。

○菅野教育長 それでは早速、家庭学習の充実に向けてということで資料の説明をさせていただきます。

前回の総合教育会議で全国学力・学習状況調査における岡山市の子どもたちの学力の状況は、大綱に掲げた目標値には到達していないものの、小学校・中学校ともに上昇傾向にあるという報告をいたしました。一方で、子どもたちの家庭学習の状況に課題があるということが明らかになっております。

資料1-1「家庭学習の充実に向けて」をご覧ください。

現状と課題に示している表からは、岡山市の中学生の家庭学習の状況が全国に比べ、その時間においても、また計画性においても、課題があるということがわかります。そのことから、子どもたちが自主的・計画的に家庭学習に取り組むよう、子どもたち、また家庭への働きかけについて各学校の取組を支援するような方策が必要であり、来年度の学力向上推進プロジェクトでは特に家庭学習の充実に向けて取り組んでまいりたいというふうに考えております。ただ、家庭での学習をするに当たっては、子どもや家庭や地域の実態に大きな違いがあるということを踏まえて進める必要がございます。

資料の課題解決に向けた取組、真ん中のところでございますが、この右側をご覧ください。

まず、各学校に家庭学習に関する、さまざまな効果的な事例を紹介し、各学校にはその実態に応じた取組を進めていただきたいというふうに考えております。添付している資料が各学校に示した資料の第1回目でございます。「家庭学習これだけは！」というものでございますが、これは山陽新聞でも既に取り上げていただいております。今年度は私をはじめ、教育委員会の各職員が各学校を訪問し、校長と意見交換することを通して各学校の授業改善、学力向上への意欲の高まりを感じ取ることができました。来年度は家庭学習についても校長と意見交換することで家庭学習の充実に向けた取組が活性化することを期待したいと考えております。

また、家庭学習と授業等を関連づけることも重要であると、特に重要であると考えております。子どもが学校で授業を受け、ああ、もっとこのことについて深めたいな、あるいはここは身につけたいなという気持ちになるということがとても大切であると考えており、さらなる学習意欲を喚起するような授業にしていく、こういうふうな改善を図

っていく必要があります。家庭学習と授業を関連づけることによって、子どもたちのさらなる学力向上が期待できると考えております。さらに、家庭への協力を呼びかけるために、例えばPTA協議会ともしっかり連携してまいりたいと考えております。

一方、子どもたちの学習意欲を高めることが家庭学習の充実に向けて大切であり、資料の課題解決に向けた取組の左側に書いておりますように、キャリア教育の推進などによって子どもたちが夢や目標を持てるようにし、学習意欲を高めていかなければならないということも考えております。資料の一番下の図のように、子どもたちの学力向上は問題行動等の防止・解決にもつながるものであり、こういったよい循環をしっかりと確立し、教育大綱の目標の達成を目指してまいりたいというふうに考えております。

以上でこの項の説明を終わります。

○市長 はい、続きましてベネッセコーポレーションの西島さんから資料の1-2をご説明いただきたいと思います。

○ベネッセ(西島) はい。ベネッセコーポレーションの西島でございます。

右肩、資料1-2と書いております「家庭学習の充実」という資料に基づきましてご説明申し上げます。

この資料の構成なんですが、前半は「全国学力・学習状況調査」の家庭学習に関しまして岡山市のデータを載せております。前回の報告と重複するところもありますので、そこはさらっと参りたいと思います。後半、全国的な家庭学習に関するデータということでご紹介を進めてまいります。

右上2番のページでございます。前回、層別の分析ということで、岡山市の児童・生徒の皆様を4つの層に分けた形で、どのような学習行動をされているのかという差異を見てまいりました。今回も家庭学習に関して4つの層に分けたグラフを掲載しております。

3ページのところはテレビやビデオ・DVD等を平日どれぐらい見ているかということで見ていただきますと、やはり層別にきれいに斜めに並んでいるということで、層Ⅳの児童・生徒の皆さんはこういった時間が長いということがわかるかと思っております。

同様に次のページ、ゲームに関しても同じ傾向でございます。ただ、ここでゲームに関しては、小学生より中学生のほうが大分長いなというところも1つポイントかなと思います。

それから、5ページになりますが、こちらは携帯電話、スマートフォンの利用という

ことです。小学校はそれほどもちろん持ってないということもあると思いますけれども、中学校のほうは比較的長い生徒の方が層Ⅳにいらっしゃるということがわかるかと思えます。

6ページですけれども、こちらは平日の勉強の時間のグラフになります。こちら斜めのラインになっております。

続きまして、7枚目は休みの日の勉強の時間ということで、ここは小学生に関しては層Ⅰが非常に長い、層Ⅱ、層Ⅲ、層Ⅳは余り変わらないというようなことが見えております。これは後でも出てきますが、塾に通っている方が層Ⅰの方に多いということもございませう。中学生は斜めになっているような状況です。

それから、8ページですけれども、こちら以降はここではまず放課後に何をしておいでかということの質問になります。これも層Ⅰ、層Ⅱ、層Ⅲ、層Ⅳときれいに並ぶところが多いかなというふうにおいでしております。先ほど申したように小学生のほうは中やや左に「学習塾など」とありますが、層Ⅰの方が突出をしておいでしているという状況がございませう。それから、前回お話がございましたが、中学生に関して層Ⅳの方の部活の参加率が低いというのが一つの特徴かなと思っております。

次の9ページは、同じく土曜日の午前中に関するおいでし方です。傾向としては同じになっております。

それから、10ページが土曜日の午後になりますが、こちら傾向は同様でございませう。

こういった形で層別にいろいろ見てまいりますと、例えばゲームの時間なんかを岡山市の全体の数字を先ほどの保護者様向けの発信のデータに載せてみますと、あ、何時間もやってる人がこんなにおいでるんだという話になってまいりますので、そうならないように、こういった層別に分析をしたものを発信をされると、やはり学力とそういった時間の使い方は相関があるんだなということがわかってよいかなと思っております。

では、この後、全国的な家庭学習に関するデータということで12ページからご覧いただければと思っております。

まず、家庭学習の時間に関して、小学校・中学校においてどのような指導をされているか、また宿題としてどういうふうなものをどれぐらいの量を出していらっしゃるかが12ページになります。グラフが2段になっておりますが、上の段がまず家庭学習1日何分ぐらいしなさいというふうなご指導の平均値になります。これは先生にお聞

きした質問になります。小学校の場合は大体学年掛ける10分というような感じの時間、1、2年生は若干多いですけども、大体それぐらいのご指導をされてるのかなということで、6年生で60分ぐらいというふうになっています。中学校では80分前後で1、2年生、2、3年生になりますと2時間程度ということで、それぐらいは家庭学習をなさいよというようなことを学校で指導されているという状況です。

それに対して下の段は、実際に先生が出されている宿題のこれぐらい時間かかるかなということで出していらっしゃる時間の目安になります。宿題として出されているものが、小学校でいいますと1、2年生はほぼ同じぐらいの時間を使ってできるもの、3年生以上になりますとだんだん差が開いていって、60分勉強しなさいよと指導されていても宿題としては40～50分でできる分を出されていると、少し時間が余るということで、自主学習をなさいよという指導をされているのが小学校のパターンになります。

中学校に関しては教科ごとに宿題が出されますので、この下の段の右のグラフは1教科、ご自身の担当教科に関してどうですかということで平均すると、大体30分で終わるぐらいの宿題を出されているというような状況です。ところが、こうなりますと2、3教科であれば上の学習時間として指導されている時間の範囲内ですが、4教科になりますともう超えてしまったりか5教科になるともうできないと、1日ではこなせないという量が出てしまいがちになります。したがって、最近では中学校の中で教科間で宿題を1週間、何曜日にどんなものを出すかということ学年の中で調整をされる学校さんも増えているという形になっています。

先ほど自主学習というお話がありましたが、13ページになります。小学校ではどういった宿題を出しているかといいますと、昔ながらの漢字ドリルや計算ドリルといったものもちろん多いんですけども、それに加えて一番上にありますような自学ノート・自主的な学習、中学校でもその自学ノート・自主的な学習というのが最近が非常に増えています。何でもいから学びをつくり出せといいますか、気になったことを調べるとか、あるいは何かをつくってみようとか、さまざまな自主的な学習の指導をやっていこうというような方向で動いていらっしゃる学校さんが増えているというような状況です。

それによって、次の14ページに家での勉強の様子ということで、これは小学校・中学校の子どもさんにお聞きしたことでありますが、最近非常に増えておりますのが、一番下にあります赤で囲った「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」あるいは「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」というところが、かなり

増えているということがわかるかと思えます。主体的な学習をやっという教育の流れに沿った形で動いているのかなというふうに思っています。

次は少し話題が変わりまして、15ページになりますが、家での学習の様子です。

ながら勉強といえますか、ラジオやテレビをつけっ放しで勉強している割合、集中してできているか、できていないかというところになるかと思えますが、中学生のほうを先にご覧いただければと思えます。1990年といえますと第2次ベビーブームの頂点のちよっ後ですので、まだまだ競争が激しかった時代かなと思えます。その頃はまだ半分弱の生徒の方がながら勉強をしていたということが言えるかと思えますが、ながら勉強が徐々に増えていって、この10年ぐらいの間で少しまた減ってきているというカーブがおわかりになるかと思えます。この全国調査の結果に基づいて家庭学習を充実させていこうという学校さんが増えてきて、このあたりの改善をしてきている。特に青い棒グラフの成績上位層については、かなり改善しているということが言えるかと思えます。

一方、左側の小学生ですが、大きな傾向としては大体同じなんですけれども、課題だなというふうに思われるのが、2015年のオレンジとグレーの成績中位・下位の方の回答です。ここは中学校でいきますと山が下っていくようにながら勉強が減ってるんですけども、ここは逆に増えています。したがって、小学生の保護者の方とのコミュニケーションのあり方ですとか、あるいは小学生の勉強の仕方、家庭の環境、何らかの影響があって恐らく、上位層はいいんですけども、中位・下位の方の勉強の環境が以前と変わってきている、その原因までは突きとめ切れていないというところではありますが、何らかの変化があるというふうに見ていいかなと思えます。

また、次の16ページはもう想像に難くないデータになりますが、中学生における携帯電話、スマートフォンをどう扱っているかというところで、もう明らかに成績上位層のほうが少ない値を示しているということが言えるかと思えます。

次の17ページですけれども、こちらは中学生の中間・期末試験のテスト勉強の開始時期になります。2006年と2015年を比較したものになっておりますが、2015年のほうを主にご覧いただければと思えます。青とオレンジを足すとテスト勉強を10日以上前からしている生徒の割合になりますが、成績の上位・中位の方の7割は大体10日以上前から勉強されてますが、成績下位のほうになりますと10日以上前から勉強しているのは半分と、1週間前から勉強している生徒さんが7割ということで、やはり学習のスタート時期が遅いということが言えると思えます。また、成績下位の一番右に丸を囲ってます

が、5.2%の生徒の方は試験前でも勉強しない。これは以前もそうなんですけども、そういう傾向がありますので、このあたりの改善をどうするかというところは考えていかなきゃいけないところかなというふうに思います。

次のページからは別の調査になりまして、前回のこの会議で保護者としてどういうふうにお子さんに指導したらいいかというようなお話もありましたので、家庭での子どもの生活・学びに関する調査の結果を持ってきております。こちら、かなり壮大な研究プロジェクトになっておりまして、まだ3年目なんですけれども、これを12年間、小1・2・3は保護者だけの調査ですが、高3までずっと続けていって12年間継続して、どう変化していくかということを見ようとしている3年目に今当たりますが、データとしては今2年分だけが出ておりますので、ここでは1回、2回のデータをお持ちしているところであります。

次のページですけれども、19ページ、どんな調査かといいますと、勉強が好きな児童・生徒の方、嫌いな方というふうにいっちゃると思います。左のグラフは小4から中3まで成績層に応じて勉強が好きかどうかと、好きですかという質問にイエスと答えた方の割合になっています。当然成績と相関があるというか、差がついてるわけなんですけれども、この右側に書いておりますように、第1回、2015年度に調査をしたときに「好き」と答えた方が2016年度に同じ方に1つ学年が上がって質問したときに、「好きをキープ」しているのか、「嫌いから好き」に変わっているのか、「好きから嫌い」に変わっているのか、「嫌いなまま」なのかということまで4分割をしてデータをつくっております。特に今日は「嫌いから好き」になるにはどうしたらいいんだろうかと、どういった形でモチベーションを上げていったらいいのかというふうなところを分析をしております。

まず、例えば20ページ、次のページになりますが、保護者の方がどういうふうにかかわっていくと勉強が「嫌いから好き」に変わっていくのかという観点になります。

よく褒めたり励ましたりしようというふうなことが言われます。実は褒める・励ますだけではほとんどきかないということがこのデータからわかってきます。褒めるだけ、「励まし中心」というふうに書いてますが、グレーのところがその方たちになります。そこではなくて、一番「嫌いから好き」に変わっているのは、「勉強&励まし」と書いてますが、下に表があります。勉強に関して勉強そのものを教える、やり方を教える、おもしろさを教える、また励ますというふうな両方をやっている保護者の方のお子さん

が「嫌いから好き」になっているということで、励ますだけでは足りないということがこれからわかるかなというふうに思います。

では、次のページですけれども、じゃあどんな形で勉強の中身を教えるのか、あるいは勉強のやり方を教えるのかということで、何をやったら変化していくんだらうというのが次の21ページになります。小学校の場合は余り変化がございません。中学校で特に変化が大きいのが勉強のおもしろさを教えるというところで、「好きから嫌い」になるのも勉強のおもしろさが教えられてないとそうなる。「嫌いから好き」に変わる、「嫌いなまま」というところの差もそこに大きく出てきますので、勉強のおもしろさをどう保護者として子どもさんに語りかけていくかということが一つのポイントになっていくのかなと思います。

また、勉強の仕方ということでいうと、次の22ページになります。かなり具体的な勉強のやり方を書いてありますが、ここでも小学生も中学生もかなり差が大きく開いています。「嫌いなまま」ではなく「嫌いから好き」になるお子さんが多くなる方法として左に4つ書いてありますが、こういったことを具体的にやってみようということで働きかけをする、あるいはお子さんもそれを実践するというので、「嫌いから好き」になる可能性が出てくるかなというふうに思います。

次の23ページですけれども、こちらは先ほどの勉強のおもしろさというところとかかわるかと思いますが、新しいことを知る喜び、そういったところですね、一番上のところ、新しいことを知るのがうれしいから勉強したいんだというふうにお子さんの気持ちを変えていくというのがすごく大事なところで、ここで大きく差が出ているということになります。その今の勉強に限らず、さまざま新しいことを知る喜びを体験させていくというような仕掛けづくりというのも家庭の中では大事なんだろうなというふうに思います。

それから、24ページですが、自己肯定感と「勉強の好き嫌い」ということでグラフ2つありますが、特に下のほう、「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい」ということで、チャレンジ精神を持っているお子さんは「嫌いから好き」になる可能性があるというふうに言えるかと思います。

それぞれ断片的なデータですので、1個1個でどうだというのは言いにくいところがありますが、統合的に見て、最後の25ページのところですが、学校としては宿題の量的なマネジメント、できない量を与えずにちゃんと頑張ればできるという量をしっ

かりコントロールしながら与えるということ、それから主体性を引き出すような宿題を与えていくということ、また保護者としては励まし、それから家庭学習の環境整備ということをしっかりやりながら、お互いに協力しながら真ん中にある新しいことを知る喜びの体験、勉強のやり方（学習方略）、それから勉強のおもしろさというあたりを提供していくということが大事かなと。そこには当然自己肯定感というのがベースにあって、子どもたちに大きな影響を与えていくということかというふうに思います。

以上、保護者の方のかかわり方、あるいは学校としての指導の最近の傾向ということで整理いたしました。

以上になります。

○市長 はい、ありがとうございました。ただいまお二人の説明いただきましたが、これに対してご意見などございましたらお願いいたします。

○塩田委員 ベネッセさんとそれから東京大学の共同研究の分析はすごくわかりやすく、具体的に何をすればいいかということがわかったかなと思います。励ますとか自己肯定感の醸成という、もうこれは親が主体的にかかわらないとできることではないということなので、家庭学習というのは保護者の役割が非常に重要ということが見てとれたかなと思います。

また、岡山市の状況で、このベネッセさんの資料の6ページ、7ページを見ていますと、休日それから平日にかかわらず全く勉強をやっていないという生徒さん、層Ⅳでは中学校では20%以上いるということはびっくりしたんですけども、もしかしたらこの子たちは本当に先ほどの分析でいくと保護者とかかわりがもうほとんどない子たちなのかなというふうに思いました。この分析からわからないんですけども、家庭の経済状況とかというのも家庭学習の長さにもかかわってきているのかなというふうに思います。忙し過ぎて子どもたちとかかわるゆとりがない、時間を持ってないという、そういった中学生たちに私たちが何ができるのかということを考えていかなきゃいけないのかなというふうに思っております。

あと、それと同時に層Ⅰ、層Ⅲの児童・生徒の家庭学習を充実させるためにも、親が家庭学習する子どもたちを励ましたり、それから認めるようなステップがあれば、なおいいのかなというふうに思いました。宿題を出す側がそういったステップが入れられるように工夫をするということも必要なのかなということを感じました。

○市長 はい、今の塩田さんのご意見の中で、この中学生で休日に全く勉強しない人、

20%以上の方がそういうふうになっているわけですが、これはやはりほとんど保護者とそれほど接触がない人なんですかね、感覚的には。下村さん、何かありますか。

○**下村中学校長会長** 必ずしもそうとは言い切れないとは思いますが、実際には保護者が放任をしているとか土日でも保護者が仕事に忙しいとかというおうちが多いと思います。それから、ほかの日の家庭学習も含めてですが、やはり小学校時代に親とかかわりが余り持ててないと。学習習慣も何か教えてくれということではなくて、子どもが安らぎを持てるような環境の中でしておれば少しはわからないこともできると思うんですけど、そういう関係づくりもできてないような状況で、だんだんだんだん大きくなってくる。中学校の勉強で、いよいよわからなくなってくる。わからないから、ほかのことをやりたがる。スマホやゲームをやりたがる。層Ⅰにはなれない、なかなかかなりづらい環境で育ってしまったという傾向がこの傾向かなというふうにも思っています。

だから、我々としては、そういうふうな層Ⅳのような子でも、わかるということがなかなか難しいという子でも、ほんのわずかでも、ちょっとでも字を書く、漢字の練習をする、ちょっとでも興味を持たせるというような工夫をしながら家庭学習に結びつけていく。だから、保護者に対しては、もう少し時間をとれるような生活を是非ともいろんな福祉の関係とかそういうところで工夫もしてほしいし、それからそれがなくても子どもが何とか少しでも勉強を諦めないという環境づくりをしていく必要があるというふうに取り組んではいます。

○**市長** はい、ありがとうございます。

教育委員さん方のご意見はございますでしょうか。

○**石井委員** 私なりに今回ベネッセさんに分析していただいたことの意味を改めて考えてみますと、まず第一に今特にインターネット等を通じて、さまざまな教育の考え方が広まっている中でということと、それからもう一つはお金と人手と時間という強い制約がある中で、確率の高くて費用対効果のある打ち手を確実に打っていくということが非常に重要かというふうに思ってます、その中でこういった可能な限りエビデンスを保って、特に多くの人に理解をしていただくということが必要なときに、このデータでお示しするというのはすごく価値があることではないかなというふうに感じておりました、今回の分析でも来年度の取組にしようとしている家庭での学習に打ち手を打つということに価値がありそうだということを分析いただいたというふうに理解してます。

今もいろんなご説明があって、家庭でのあり方というのがそれぞれ事情もあって、個

人の自由な範囲もあるので、それぞれに自主的に考えていただくということが非常に重要だと思いますけれども、今後もこのようなビッグデータといってもいいと思うんですけども、そういったものをより活用して、正しく分析して実行につなげていくということが非常に価値があることだと思っております。

それから、今ご指摘いただいた、保護者がなかなか時間が持てないという点については、私も企業で働く立場でありますけれども、働き方改革等が進んでいくというふうに思いますので、一定程度はそういう時間が増えていくのではないかなと。そのときに子どもと接する時間を増やしてもらえようような促しができればいいかなというふうに感じております。

○市長 石井さんの今のコメントに関連するんですけど、教育長が説明した資料の、右側にある「自主的・計画的に取り組む家庭学習」の中で、「定期的な情報発信」と書いてますよね。これは家庭への協力という面での情報発信なんでしょうけど、どういうツールで情報発信していくんですか。具体的に情報発信というけども、発信しても受信がなければ発信しただけじゃ意味が余りないんで、どうやって家庭に伝わっていくのか。そのあたりはどういうふうに考えられてるんですかね。

○事務局(岡林指導課長) 家庭に切り込むというのは、なかなか難しい、大きな課題だというふうに認識をしております。まずは、こういうふうな取組が効果的だったということをお我々としては学校のほうに示していきたいと。教員のほう、学校のほうが、実際授業する教員がそれをしっかりと理解、認識をしていただいて、じゃあうちの学校では、うちのこういう環境の家庭ではどういうアプローチができるかということと一緒に考えていきたいと。そういうふうな、ちょっと遠回りになるかもしれませんが、2段階でしっかりと働きかけていきたいというふうに今のところは考えているところです。

○市長 このビッグデータというのは確かに非常に有益だと思うんですけど、それが先生には伝わるでしょうけども、各家庭に本当にどうやって伝わるのかなというのはちょっと疑問なしとしないんですが、青木さん、何かありますか。

○青木小学校長会長 今日のこのベネッセさんの分析というのは非常に当たってるなと思います。まさに今学校が家庭学習に対して行っていること、そのものをご説明いただいたなと思っています。時間数にしても、それから内容にしても、基礎学習であるとか、それから自主的な学習であるとか、本当に学校では今試行錯誤しながら一生懸命取り組んでいます。しかも、これは今に始まったことではなくて、例えば校長会にしても、も

う五、六年ぐらい前から学校にアンケートをとって、どういうことをやっているか、どう家庭に出していくかなど家庭との連携の研究会もやっております。

本校においても家庭には情報発信について、いろんな形で行っています。学校だよりであるとか学級通信であるとか、それから個別にできていない家庭には、子どもたちにはこういう自主学習を基本的にこんな形でやってますよという具体的な話で常に発信をしています。それぞれの学校でも発信をしているんですが、ただ、この家庭学習につきましては、学校からの発信はもちろんある程度の影響は与えられるんですが、受け取る側が、さっきの4層あったんですけれども、層Ⅳにおいては受け取ってもらえない現実があります。

例えば、つい先日も、こんなの配ってますよと担任が言ったんですが、そんなの見ないと言って終わりですね。そういう家庭にも繰り返し繰り返しいろんな情報を発信しているんですけれども、そこにどういう問題があるか考える必要があると思います。例えば、生活そのものが厳しい家庭がたくさんあります。経済面もそうです。就労面もそうです。それから、生活習慣の乱れもあります。テレビを一緒に見て本当に夜遅くまで過ごしている。朝まで過ごしている。親が帰ってこない。そういった非常に厳しい家庭に対して、どう啓発していくかというのが難しいところです。

そういう意味でいえば、先ほど来おっしゃられているような、就労でいえば事業者へ直接的な働きかけ、啓発のルートはないものだろうかと考えています。参観日等なかなか出てこられない保護者に対して、事業者さんのほうから直接的に啓発していただくとか、そういった事業者の方を顕彰していただくなどが必要だと思います。あるいは、岡山市の福祉行政のほうから、そういう厳しい家庭に直接何らかの形で入り込んで生活改善をしていただくことも必要で、地域子ども相談センター等の積極的な関与も必要だと思います。

福祉行政の面から突っ込んでいかないと、なかなかそういった届きにくいところには、いつまでたっても、なかなか改善ができないという実態というのをわかっていたら、直接家庭に対して、もっと岡山市の子どもたちをこうしましょうという、そういった啓発をダイレクトにさせていただきたいなという思いがあります。

○市長 ありがとうございます。どうしてもこういうときに層Ⅳのところが目立ちちゃいますけれども、層ⅠからⅢも相当数の方が学習環境が必ずしも十分じゃないみたいなどころもあるんで、全体としてどうやっていくのかということも私は重要なんじゃない

いかなというような気がいたします。

○藤原委員 家庭学習について、さっきの発信にもちょっと絡むんですけども、このところベネッセさんが層を分けてのいろんなデータをくださって、ちょっと家庭学習に対する気持ちが広がったところがあります。それは今学力の捉え方が大分変わってきてますよね。前のような定量的な結果をもちろん大事にするんだけども、それ以上にその成果がどういうふうにかに反映するかというのは、入試が変わることにも合わせて随分変わってきてる。そしたら、家庭学習のあり方が広がらないと、さっきの知る喜びであるとか体験が豊富であるとか調べ学習とか自主学習とか、今直接的には学校の宿題が授業から宿題に行くモチベーションが高まるような授業の工夫であるとか家庭学習これだけとは授業これだけとはリンクすると思うんですが、それに加えて、いろんな忙しくなった家庭や経済的に難しい家庭に対して知る喜びを子どもが感じることができる場面とか体験に行ける場面とかというのは、やはり家庭によって随分差が出てくるんじゃないかと思います。それが学力につながると。

そうしたときに、例えば市内で今だったら民間の方がやってる理科の実験を楽しくする教室であるとか、それからイングリッシュビレッジのような体験ができる場所とか読み聞かせのようなどころがあるとか、いろんなところがあるんだけども、それに行かせてあげられる親は情報を持っていたり理解があるところだろうと思いますから、その辺の情報を教育委員会や市がうまく流す。町内会もあるだろうし、せっかく地域協働で横の連携でやってるんだから、そういうところで流すと、必ずしも親がその力がなかったとしても、本当に知る喜びをさっきも励ましとともにわかる喜びとか授業、勉強を教えることができる。これはなかなかできない家もあるんじゃないかと思うので、そういうところでモチベーションを高めるとかちょっときっかけができるとかスイッチが入るとかということをするには、やはり行政が何か仕掛けていくのが大切かなというのはちょっと思いました。

○市長 はい、どちらにしても、このビッグデータをここだけで持つておくのはもったいないですよ。どうやって伝えていくかということだと思いますが、妹尾さん初めてですけども、何かございましたらお願いします。

○妹尾委員 余り頭の中、整理できてないんですけど、やはり層に応じた、それぞれの取組というのが必要なかなと思います。まず、全体的にいうと、先ほど石井委員さんおっしゃったように親の側がどれだけ子どもに手間をかけられるか、家庭学習に関してと

いうところで、やはり余裕がないご家庭というのが多いのかなと思ってます。そういう意味では、先ほどご指摘あったように福祉の関係であるとか子どもの貧困の問題とも通じることなのかなというふうに思ってます。あと、層の上のほうの方に関しても、好事例の提供を通じて、こういう事例がよかったんだということを家庭に発信していただくと、非常に効果的なのかなというふうには感じました。

○市長 はい、ありがとうございました。

教育長はベネッセの資料など見て、何かコメントがあれば。

○菅野教育長 ベネッセさん、いつもありがとうございます。もう本当に素晴らしいデータを頂戴いたしまして、本当にしっかり活用してまいりたいというふうに考えております。教育長というよりも、つい2年前校長をしていたという立場になるかもしれませんが、家庭が家庭としての機能を有していない、そういった状況が見受けられる家庭がたくさんあるというのは、我々が小さいときに比べて、その差が非常に広がってきているんじゃないかなということを非常に痛感いたしました。教育長になったときに、そこは現場から教育長になった者として本当に改革していかないといけないなということも思いましたし、それはただ先ほどもお話がありましたが、教育委員会だけ、学校だけでできるものではなくて、もうオール岡山市で、市長よくおっしゃってくださるんですが、オール岡山市で取り組む課題でございますので、今後ともしっかり連携してまいりたいというふうに思っております。

○市長 経済のグローバル化などで所得格差が進んでいるというようなことも、もちろん一因にはなってるんでしょうけれども、こういったデータを的確に家庭に届けて家庭の意識を変えてもらうというのは重要なことなんですけど、逆に言うと、そこに余り先生方に負担をかけ過ぎると次の議題の先生の負担軽減との関係もまた出てくるんで、この問題についてはまだあるかと思いますが、とりあえず教職員の勤務負担軽減の話を見せていただいて、最後にまた全体で議論させていただければと思います。

では、資料の2-1について、教育長からご説明をお願いします。

○菅野教育長 教職員の勤務負担軽減についての資料でございますが、この資料の説明に入ります前に、教職員の勤務負担軽減ということにつきまして今私が思っているところをまず述べさせていただきたいというふうに思います。

働き方改革と、働き方改革国会と言われるぐらい今国会でも大きく取り上げて議論されているところでございますが、教育界にとっての働き方改革につきましては、教育の

質を維持しながら教師の長時間勤務を是正すると。教育の質を維持する、そして教師の長時間勤務を是正するという、この相反するような2つの命題があります。多くの教師が昔は教育実習を経験して、よし、この先生という仕事を一生の仕事にしていこうというふうに思ったものです。ところが、今教育実習に行った学生が、これは大変そうだから、もう先生になるのはやめたいなということを感じるような時代になったと。若い人の意識が以前と違ってきているという現状がございます。

私がそこで思ったのは、今後やはりよい人材に教職についてもらいたい。そのときに、ああ、これは自分の時間が持てんな、教師はもう本当ブラックだなというような学校現場ではなくて、自分の時間も持てる、でも子どもと接する喜びを持てるといえますか、子どもの成長に携わっているという喜びも持てる、そういった職場にしていけないといけない。つまり改革を進めていけないといけないなど。そういう長い目で見たときに2つの命題を解決できるものではないかなというふうに思った次第です。

行政の世界とかそれから会社世界が持つ文化と学校という世界の持つ文化には、かなり差異がございます。また、小学校・中学校・高校という学校種でも文化の違いがございます。こうしたことを念頭に置いて改革を進める必要もがございます。そのためには本当さまざま工夫していく必要がございます。そして、その中でも我々が一番主眼に置きたいのは、チームとしての学校、チーム学校ということで子どもの教育に当たる。こういったことに重点を持っていけないといけないなど。これが働き方改革の実は最大の方策なのかなということも思っております。

では、資料の説明に入ります。

まず、一番左の要因のところでございますが、これはアンケートで教職員が負担に感じていることを割合が高い順から上から並べたものでございます。調査回答・報告書等の作成が高い割合になってはいますが、実際には時間的な負担ではなく負担感の部分ではないかなと考えております。この実質的な負担時間と負担感については、現場の方々とも議論が必要になると考えております。このことについては後ほど説明しますが、ワーキンググループ協議でしっかり議題として取り組んでいきたいと思っております。

左から2列目、これらの要因に対して、これまで行ってきた対策を示しております。具体的な削減時間が計算できるものは、その右側にマイナスで示しております。さまざまな対策を行ってまいりましたけれども、資料右下に示しているとおり、現状としては時間外勤務の大幅な削減にはつながっておりません。小学校ではマイナス2時間33分と

いくらか減少しておるんですが、中学校ではほとんど変わらない。やはり部活動の時間が大きく影響しているのではないかなと考えております。

このような現状の中で、今後の方向性といたしまして2点挙げております。

国での考え方もほぼ同様だと思いますが、1つ目は「日本型学校教育」の課題、2つ目は教職員の意識の問題。

「日本型学校教育」の課題は、学校の具体的な業務削減と学校に依頼する外部への啓発が鍵というふうに考えております。例えば、夏季休業中の閉庁日の設定などは、この一つの啓発だと考えております。

2つ目の教職員特有の意識の課題は、管理職も含めた教職員自身の勤務時間のあり方に関する意識改革というのが鍵だと考えております。例えば、定時退校の日の設定によって、その日の仕事の優先順位をつけるであるとか仕事の終わりを意識した働き方であるとかを考えてもらう。また、管理職対象の労務管理研修でも、引き続き教職員の働き方改革について説明していくことなどが重要であると考えております。教職員については教職調整額というのがあって、時間外勤務というのは特別に定められていなかったということで、何時までが勤務時間かということが非常にあやふやになっているという、経緯がございます。そういった教員の意識をしっかりと変えていく。これはそういう残業手当のようなもので変えていくのか、いや、もっと別の方法があるのか、こういったことも国の方針とも合わせて考えていくべきだと思っております。

それから、これらのことについては、今後、教育委員会の事務局そして校長、教職員の代表の方とのワーキンググループを今立ち上げておりますが、しっかり協議してまいりまして実質的な改革を目指していこうと考えております。特に部活動の負担軽減につきましては、国も年度末にガイドラインを出すべく先日骨子案が出されました。ベネッセの資料にもあるようですが、岡山市としても対策を拡充しようと考えております。週1日以上設定している休業日については、国のガイドラインを見ながら週2日以上にし、そのうち1日は土日のどちらかを設定する。また、部活動指導員については、予算要求を約800万円増としましたが、平日を中心に派遣を1人当たり年40回、増加したいというふうに考えております。

以上で説明を終わります。

○市長 ではベネッセさん、お願いします。

○ベネッセ(西島) 右肩、資料2-2と書いております「教職員の勤務負担軽減」という

資料をご覧ください。

今教育長からお話をいただきましたようなところで、もう全体同じような話になってしまうんですけれども、1枚目の1ページのところで今年度本当にたくさんの動きが文部科学省を中心に発信等ありましたので、簡単にご紹介をしていきたいと思えます。

2ページ目になります。これは4月に公表されました「教員勤務実態調査」ということになります。平成18年度との比較ですので、10年間の差になりますけれども、どの職種の先生方も勤務時間は増えているという状況で、小学校においては特に校長、教頭先生、一般の教員の先生、それから中学校において一般の教員の先生というところで比較的大きく増えているというような状況にあります。

また、次のページですけれども、3ページ、こちらは年齢別になります。年齢別でもどの層の先生方も増えていらっしゃるんですが、特に51から60歳というベテランの先生方の増え幅が大きい。教頭先生の増え幅とも関係するのかもしれませんが、ベテランの先生が増え幅が大きい。一方で、量的に見ると30歳以下の先生方が時間的には長いということも言えるかと思えます。

それから、次の4枚目は土日の勤務時間ということで、小学校当然増えてはいるんですけれども、もう中学校のほうで教諭、講師の先生、部活なのかなと思えますが、土日の出勤が大幅にこの10年間で増えているということが見てとれます。

それから、次のページは別の調査になるんですけれども、じゃあ先生方の勤務状況と一般の他の職種の人たちの勤務状況どうなのかということを見てみました。少し古い資料しかなかったんですが、平成24年の「就業構造基本調査」というところのデータから1週間に65時間以上勤務する人数の割合というデータになります。

1週間に65時間ですので、1日8時間だとすると5日間勤務して40時間、25時間残業している。平日だけであれば1日5時間残業している。土日も出られたら、もう少し変わりますけれども。そういった状況の先生、もう25時間の4週で100時間ですので、もう過労死のレベルであるというふうに厚労省では出しているかと思えますが、そういった先生の割合ということで教員10.5%、10人に1人の先生がそういったお仕事の状況であると。今この1年ぐらいで相当話題になりました運送関係の方々も、もうさらに大きいんですけれども、もうそれに近づいてきているというような状況でございます。

では、この変化としてはどうかということで次の6ページ目になりますが、同じ調査が平成19年にも行われています。この5年間で変化がどうだったかというところで見

いきますと、教員の増え幅が一番大きいということが言えます。やはり他の業種に比べても先生方のお仕事の時間の長さというのは長くなっている割合が高いということが言えるかと思います。

次の7ページは、こちらにもまた少し違う観点の参考資料になりますが、弊社のほうで調査をしましたもので、教員の悩みということで、先生方がふだんどういうことで悩んでいらっしゃるかということを書いています。この3回の調査で、そう大きな傾向の変化はございません。真ん中やや下にあります教材の準備、事務書類、それから教育行政が学校現場の状況を把握していない、すみません、言いにくい言葉でございますが、こういったところの悩みが先生方には多いということが言えます。

また、次のページ、先ほど教育長のほうから子どもの成長にかかわる喜びというお話ありましたが、先生方の教員生活の満足度の調査になります。学習指導に関しては、小学校・中学校とも、この近年は相当満足度が上がっている状態、一方で教員生活と私生活のバランス、ワーク・ライフ・バランスというところは大分下がっているというふうなところが見てとれるかと思います。やりがいは新たにしかとっておりませんが、やりがいとしては相当高いやりがいを持たれているということがわかるかと思います。

以上、参考資料でございました。

また、国の発信に戻りますが、何回も発信がいろんな発信がありますが、大体共通しております。9ページは6月に発信されたもので、こちらは諮問になります。

学校が担うべき業務とは何かということ、その中で教職員が担うべき業務あるいは教職員ではない専門スタッフの方が担うべき業務のあり方、その分担はどうなるのかということ、それから学校の組織運営や勤務のあり方というところについて検討するようにという諮問がなされています。

その後もさまざまな発信がございまして、10ページには8月にありました緊急提言ということで、先ほども教育長からもありましたが、勤務時間を意識して業務を進めていくことということで、タイムカードですとか校務支援システムとか、そういったところを活用するようにという話も出ています。それから、全ての教育関係者が学校・教職員の業務改善の取組を強く推進していくことということで、校務支援システム導入による効率化、あるいは学校に対する依頼の統合化ですとか給食費の公会計化の促進ということが言われています。また、国として持続可能なということで、勤務時間の管理や専門スタッフの配置ということで、これは平成30年度はかなり予算を増やして国として

も推進をしていくようになっております。

11ページになりますが、こちらは年末に出された中間まとめというものになります。内容はほぼ同じような話ではございますけれども、1つ目の基本的には学校以外が担うべき業務ということで、ここで定義されているのが、登下校に関するところ、それから放課後から夜間における見回り、それから学校徴収金の徴収・管理というあたりを地方公共団体や教育委員会、保護者、地域、さまざまな形で担えないかというふうなお話が出てきております。また、学校の業務だけでも必ずしも先生がやらなくてもいいんじゃないかということで、ここに挙がっているようなことをどう外部の力を借りながらやっていくかということを考えていかなければならないということ。それから3点目は、先生の仕事であるけれども、もっと負担が減らせるんじゃないかと、さまざまな知恵を絞ろうよというふうな発信がなされています。

12ページのところは、「学校における働き方改革に関する緊急対策」ということで同じようなお話になりますけれども、本当に今年度何回も同様の発信がなされ、一番下にありますように文科省の中にもそういった部署をつくって国としてしっかり取り組んでいきますという宣言が出されています。

先ほど教育長からご紹介がありましたのが最後のページになりますが、今年1月に入りまして、まだ骨子の案という状態ですけれども、運動部活動、これは最終的には恐らく音楽系の吹奏楽とかもかなり練習しますので、そのあたりも影響するかもしれませんが、運動部活動のあり方に関するガイドラインの案ということで出てきております。

まず、運営のための体制整備ということで、都道府県が方針を出し、また設置者がそれに基づいて参考にしながら方針を策定しなさいというふうな案が出てきております。それから、合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組ということで、部活動は短時間でどうやったら効果が上がるのかということをしっかり研究しなさいと。それから3点目は、もう日にちの規制をしていこう、あるいは時間の規制をしていこうというふうなところがございます。4点目は、生徒減ということもあるでしょうし、1校ではなかなかできないことを複数校合同でやれる部活動のあり方も考えたらどうかということをやっています。それに伴いまして、5番目、いろんな大会がありますが、学校単独での大会参加ではなくて、複数校合同チーム等、弾力的な参加形態がとれないかということの研究をしようというふうなことが挙げられております。

以上になります。

○市長 この問題に関しては、下村さんと青木さんに教職員の立場等々の議論を踏まえてコメントをいただいてから、教育委員の皆様方にご意見いただければと思います。

○下村中学校長会長 教職員の勤務負担軽減ということで今部活動のほうが出ましたが、確かに教員は部活動を負担に感じているというのは実態です。部活動がとても好きな人でも実際にはやはり制約があるので、負担を感じるというのが実態ではありますが、しかし子どもが変容していく姿であるとか実際に子どもが本当にうまくなっていくというような姿を見ると、もっと頑張りたいというふうなことで頑張っている教員もあります。教員のモチベーションを上げるという意味で部活動がというところも実際にはあります。

それから、子どもの体力的なものを考えたときに休養日をとってあげるというのはとても大事なことだろうと思いますし、本当に四六時中鍛えれば何とかかなるというのはとんでもない話なので、ある程度の時間や制約を設けていくというのはいいかなというふうには思うんですが、ただ休養日を何日にしなさいとかというあたりをいきなりもうぱんと決め、それをやりなさいというふうになると現場は少し混乱を起こすだろうなというふうには思っています。ただ、教員の負担軽減を徹底してやっていこうという立場で言われると、もう上から本当に言っていただくほうが実際には学校としてはやりやすいのかなというふうに思っています。

時間的なもので少し余裕があるんなら、いろんな競技団体でありますとか中体連でありますとか、いろんな子どもたちにかかわっていく団体、いろんなことを話し合いをする時間あるいは調整をする時間、大会の持ち方もすぐ何か言われたからといって、すぐぱっと変えられるものでもありませんし、いろんな調整をしていく、相談をしていく時間を少しとらせていただいて、その上で決定をさせていただけるのが気持ちとしてはありますがたいなというふうには思いますが、負担軽減という線だけでいうと本当にもうすぱっとやっていくというほうが割り切りやすいかなと。本当に国のガイドラインが出て、岡山市独自のガイドラインもつくっていただければいいかなとは思いますが、ある程度国のガイドラインが出たから、もう学校現場もこうしますというふうなことをやっていくほうが、多くの先生方は割り切った状態でいけるかなと。

それから、子どもたちに本当に期待を持っている保護者の方もたくさんおられます。学校の勉強できなくてもええけど、サッカーだけ上手になってくれりゃあええという親も結構います。本当にその中で子どもの成長に期待するものがあるんだろうとは思って

すが、そういう保護者たちも納得がいけるというような施策というか、納得させるような理論立てをしてあげないと、なかなかまたそれが学校のほうにはね返ってくるという可能性もあるので、そのあたりも考えてもらいたいなというふうには思います。

それから、中学校のほうもかなり仕事をする時間が増えているというようなこともあります。確かに時間を削減していくというのは、本当教員の意識改革を進めていかないと、なかなかずっと慣れ親しんだ環境の中でというか、少し時間があるというようなことでやってきている経験豊富な人たちは、まだまだその流れでやっていこうという傾向があります。そういうあたりを一度整理をして、本当にもう無駄な時間を省こうとか、ここはもう切っても大丈夫じゃというあたりのところは、議論しながらもっと進めてほしいなというふうに思っています。

それから、ベネッセさんの資料の中に、最後のほうに11ページのあたりに業務の明確化・適正化、あるいはもう分担をするような国の提案が出ています。例えば真ん中の四角の「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」ということで、校内清掃とか児童・生徒の休み時間における対応をほっ散らかしじゃ学校は成り立たないというところはやはりあるかと思しますので、整理をして学校がすべきこと、先生がすべきこと、それから先生がしなくてもいいというふうに分けていくのは簡単かもしれませんが、現場はまだそこはそんなに簡単に進むものではないというふうに思しますので、この提案については本当にいろんな方がもっと考えていく必要があるのかなというふうには思います。

学校の先生がいつも大変だというのは、給食と掃除がなくなったら本当に楽じゃといえます。確かにそうですが、でもそれをやるから本当に子どもたちが育っているという我々自負もあります。それをないがしろにはできないと。教員である以上は、そこを責任を持って指導するというのは絶対やるべきことだというふうに思ったりもしていますので、そういうふうなこともご理解いただきながら時間の短縮化を進めていく必要があるのかなというふうに思います。

○市長 青木さん、お願いします。

○青木小学校長会長 昔から教員の仕事には切りがないということで、逆に言えば、やりがいがあれば幾らやっても全然負担感にはならないんですね。むしろ満足感が出てくる。ただ、先ほどもありましたけれども、これって本当に私たちがするのということも実際あるわけです。何を重要視していくのかということがあるわけですがけれども、私が

勤務する小学校の実態を申し上げますと、今年度で言えば今まで職員1人当たり、今年から大分少なくなりました。毎日2.5時間から3時間ぐらいの時間外勤務というふうに、今年度は集計しています。

今、職員室に出勤簿の上に朝来たら今日はいつ帰るというマジックを置いて、それまでに効率的に仕事を済まそう、きちんと計画的にやっつけていこうとしています。帰るときには帰った時刻にマジックを置くようにしています。これは別に管理をしているわけじゃなくて、意識改革の一環として効率的に仕事をしようということです。ただ、ほとんどの教員が、例えば7時に置いた教員が大体8時、1時間後に置くようになるんですけども。そういったこともあって、今年随分早くなってきたんじゃないかなと思います。勤務時間が終わって7時ぐらいまでに学校を出る職員が今のところ4割程度ですね。8時ぐらいまでになると4割、残りの2割は9時、10時というふうな状況です。

仕事の内容なんですが、教材研究ということが割とクローズアップされたり、生徒指導ということがクローズアップされているんですが、本当に何が多いかというと校務分掌にかかわる業務ですね、自分が学校の中で分担をして役割を持っている業務、それから学校行事というのが非常に大きいです。計画を立てて、あるいは終わった後、反省をして総括をしていく、そういったものをきちんと職員会議で出していく作業があります。それは次の教育課程につながるもので、いろいろ反省をしながら次へ改革をしていくということです。

それから、学級集金の管理ですね。それから、宿題やノートの点検、これは本来しなければいけないことですが、成績処理もそうです。それともう一つは余りご存じないかと思うんですけども、教室環境の整備というのがあります。いろいろな掲示物を張ったり、あるいは教室内のいろいろな子どもたちのための環境をよくしていく。これは案外時間がたくさんかかります。それから、もちろん教材とかを用意しておく。それから、時間があれば教材研究ですね。時間がなければ、その教材研究は家に持って帰ります。毎日3袋か4袋、肩にかけて持って帰る教員がいます。そのまま持ってくる教員も多いんですが、そういった持ち帰りがあります。

これにさらに学年会や生徒指導部会であるとか研究部会、職員会議、定期的な会議が入ってきます。ただ、これらは効率化に向けて縮減が図れる内容です。ところが、毎日ではないんですが、問題行動に対する対応も多いです。先ほどの家庭学習ができにくい等の厳しい家庭の話にもなるんですけども、電話連絡、家庭訪問、ケース会議やネッ

トワーク会議、学校全体でいえば、ほぼ毎日行われています。そういった具体的な一つ一つのことが、じゃあどれに支援をしてもらえるのか、どういったことが本来の学校の教員としてやるべきことなのか、そういったことを本当にきちんと議論していかないといけないのかなと思っています。

○市長 中学校、小学校の先生方の勤務時間の記録はきちっとしているんですか。

○下村中学校長会長 しています。

○市長 はい、わかりました。

以上が教育長、ベネッセ、そして中学校・小学校の校長さん方のお話ですが、教育委員の皆さん方から何かございましたらお願いいたします。

○塩田委員 私、小学校、中学校訪れたときに「元気な学校 元気な子ども」というのを貼っておられるところがあって、あ、これ、すごくいいなというふうに思ったんです。ちょっと見てみると岡山市の地域協働学校の理念の一つで「元気な学校 元気な子どもを持続的に育む」という、そういう理念の一つだったということがわかったんですけども、やはりそれをずっとやっていくためには先生が元気でないと絶対に無理というふうに思います。

この資料2-1を見させていただいたときに、時間外勤務の状況を見たときに、中学校88時間のこれを見て、何か岡山市の教員になろうかなと思う学生がいるのかなというのは、ちょっと危惧してしまいます。なので、いろんな状況はあるかと思うんですけども、やはりここはしっかりと、学校ごとに違うんだと思うんですけども、取り組んで、本当に元気な学校、元気な子どもたちがいる学校にしていって、だからこそ岡山市で教員をしたいという人たちが増えてくれるような、そういう取組をしていかなきゃいけないのかなというふうに感じました。

○市長 先ほどの家庭学習も中途半端だったかもしれないので、もしコメントがあればつけ加えていただいても結構だと思います。

○石井委員 私は企業の中で生きてますので、その状況も踏まえてお話をさせていただきたいと思いますが、ちょうど今日も新聞に出ていますけれども、大企業は来年2019年、それから中小企業でも2020年から残業時間について規制が強まるというふうな想定になっています。時間については、これも想定ですけども、年間で720時間の残業、つまり1カ月に平均すると60時間程度以内にしていく必要が見込まれているのではないかなというふうに思ってます。これに対応しないと、先ほど教育長もおっしゃいま

したとおり、採用に大きく影響しますし、今いる人もいなくなってしまうという状況に産業界もあります。

それからもう一つは、健康を害するような大きな事件に発展した場合に責任をとる必要がある、あるいは大々的にそれが報道につながっていった企業が立ち行かなくなるといふところまで行きかねないと。この2点において企業も必死になって取組を開始しているという状況でして、例外的な職種というのものもあるんですけれども、この2点については学校、先生方にも当てはまることではないかなというふうに感じております。

それから、企業の中で働き方改革とセットで取り組む必要が出てきてるのが生産性向上になってます。教育長もおっしゃいましたけども、働く時間を減らしながら質を保つ、あるいは会社でいうと利益を維持する、増やしていくというのは当然会社でも求められておまして、だからこれも単位時間当たりの付加価値を上げるかコストを下げるということを取組んでいますけども、同じように無駄を減らすとか付加価値を上げるための取組で何をしなきゃいけないのかというところを一生懸命取り組んでいますので、この生産性向上というのともあわせてセットで必要になるんじゃないかなというふうに感じた次第です。

それで、先ほどご指摘もありますけれども、無駄をとる、お客様に対してサービスレベルを下げるようなことをするということについては、なかなか現場でやりにくいということがあるので、これはまずは国だとは思いますが、トップダウンでいろんなことをこうしようというのを決めていかないと、なかなか難しい部分があるというふうに感じております。

○藤原委員 私もこの資料を見て、一番負担軽減でやはり気になるのは部活動です。今世の中を挙げて働き方改革を言われていて、昨日の国会でも質問があって総理大臣が教員の負担軽減について答弁されていたと思うんですが、この流れの中では動きやすいかなと。さっき下村校長さんも言われましたが、やはり学校の中で意識を変えるというのは、なかなか難しいんですよ。本当はもう変えないと社会構造が変わって、産業構造も変わって、働き方も変わってるんだけど、なかなかやはり子どもにとっていいことをしようというのが教員の一番の誇りに思えることなので、それはそれで本当に価値があることだと思うんだけど、これだけ変わるとやはり無理が来ているので、もうベストを求めるんじゃなくて、折り合うところを見つける。

その中で部活動は、さっきの子どもの変容は確かに楽しみです。そして、部活動に関

しては、スキルが磨かれて将来役に立つこと、いっぱいあると思います。集団活動もそうですね。もう一方で、以前は授業には余り得意じゃない、入れないけど、生徒指導の絡みで部活動で支えようというところが結構大きな目標であったと思うんですが、さっきのベネッセさんの資料で層Ⅳの子は部活動の参加が低いんですよ。ということは、勉強にも向いてないし部活動にも向かっていないということは、教員のあり方も変えて、その子たちをじゃあ勉強でどういうふうにフォローするかということも大事になってくるので、部活動全力投球ということには、ちょっと難しいかなという気がしてきます。

そして、中学生が高校、大学になって同じ種目の運動系をするということも少ないようです。これはいろんな幅広いことを経験しようということもあるだろうけども、やはりどこかで無理が来ていることもあると思うので、もう一回考え直すチャンスで、もう一つは組織としてどう動くか。例えば、朝練のやり方を岡山市ではこう考えますとか回数制限つけるとか、終わりの時間は多分学校で冬時間、夏時間決めてると思うんだけど、それでもそれをしないで統一するとか。もっと言えば、コンクールであるとか大会の縛りで学校がどうしてもそれで動かないといけないようなこともあるので、組織としてそういうところにも切り込んでいく、そういう時期が来ているんじゃないかなという気がしました。

○市長 私も部活動って一体何なのかという何か基本に戻った議論を1回したほうがいいんじゃないかなと。先ほど下村さんのほうで、うちの子は勉強はしなくていいからサッカーだけうまくなればいいという話ありましたよね。でも、サッカーがうまくなるためにはサッカーの指導者が当然必要で、その指導者によっては、もうスキルは全く変わってきますよね。部活動というのは、そういうスキルを磨くためのものなのかというところで行くと、もしそうなら、それぞれの部に専門の人たちがいないと多分できないんだろうというように思うんですね。

だから、人格の形成過程において私は非常に部活動というのは有益だと思いますし、また子どもたちも部活動を通じて非常に楽しんでいくという、そういったことというのはそのとおりだろうと思うんですけど、部活動の捉え方というのが少し変わるというか、もう少し本質を見直すというか、そういったことを考えていく必要があるんじゃないかなというように思ってるんですけどね。だから、そこが先生がどうかというのもありますけど、保護者がどうか。

特に今放課後児童クラブがなかなか整理できてないから、じゃあ逆に部活動でいてもらったらいいという議論、ちょっと視点が違うような捉え方をされている方もいるんじゃないかなど。ここは私自身、そんなに分析をして言っているわけじゃないんで何とも言えないんですけど、部活動の認識というのをもう一回何なのかということをちょっと議論したほうが、我々として総合教育会議でもやったほうがいいのかなという気もちょっとするんですけどね。今、藤原さんの意見に引きずられて少し言っちゃったんですけども、また私の意見に対して何かあれば、またお伺いをしたいと思います、妹尾さん何かございましたらお願いします。

○妹尾委員 意見というか、感想めいたことになるんですけど、私は弁護士という立場でどうしても見てしまうんですけど、岡山市の中学校の先生が88時間、月に残業してるとするのは、もう黄色信号は通り過ぎて赤信号ですよ、普通の企業でいったら。どうしても私も保護者という立場があるので、どうしても学校の先生、聖職者でスーパーマンを期待してしまうんですけども、やはりそれでは持続可能性がないのかなというふうに思います。1週間に65時間以上、これはベネッセさんにもお尋ねしたいんですけど、勤務する人が教員がこんなに増えてる、何でこんなに増えてるのかなというのが素朴に思ったんですけども、やはりこの現状は改善していく必要があるだろうと。

一般の民間企業でいうと、えいやともう決めてしまって、もうこれ以上は数値目標として残業を許さないというふうにしたら何とかなっちゃうというのが結構ありますので、そういう視点もあってもいいのかなというふうに思いました。もしベネッセさん、さっきの原因というか、要因の分析というのはされてるんでしょうか。

○ベネッセ(西島) 今のご質問は弊社の資料の6ページのところです。

もうこれだということは特定は難しいんですけども、家庭環境が変化してきていたり、経済状況も含めて、いろんな変化があって、あと問題行動の増加、あるいは学習指導を強化していく。平成19年から全国学力・学習状況調査が始まりましたので、そこからもっと改善をしていこうということを教育委員会さんが旗を振りながら学校を動かしていくというのがかなり強くなってきていますので、その中で学校に対する調査も増えたでしょうし、さまざまな指導の改善のために研究をしていかなきゃいけないということが増えていったんじゃないかというふうに思います。そういうことが、もう本当にさまざまなことがあって増えていっているというのが、もう現状かなというふうに思っております。

○市長 石井さんがおっしゃった生産性の向上というのは、この付加価値が教員の場合、よくわかりませんからね。だから、その付加価値をどういふように見ていくのか。ある面、定量性というか、割り切りをしていかないとだめなところもあって、確かに給食も掃除も一つの人格形成過程において重要であることは間違いないんだけど、どこまでやっていくか。

○青木小学校長会長 今学校にアシストさんをいただいています。非常にありがたいんです。プリントの作成とかコピー、それから教材づくり、ちょっと前まで、教材づくりを人に任せて、それで教師なのというふうな認識がありました。また、自分の子どもたちのためのプリントを担当がつかなくて、どうするのと。ところが、アシストの方に入っていたら、明らかに子どもと向き合う時間が増えました。要は昔からの認識が続いていて、でも実際に支援していただくと格段に子どもと向き合う時間が増えてくる。だから、先ほどの給食であるとか、あるいは掃除についても、言えるのかもしれませんが。そういうところに入っていただくと、また一段と教師の子どもと向き合う時間が増えるのかなと。ですから、先ほどもありましたけれども、どこかで英断を下していただいて、そういったところに人材をいただけたら、変わってくるんじゃないかなというふうに思っています。

○市長 予算面でいくと私の話になるんですけど、やはり税金を使うというのはどういうことかというところの最後はバランス感覚みたいなところなんだろうと思うんですね。学校では何をすべきなのか、教師は何をすべきなのか、税金でどこまでそれを対応すべきなのかというところの最終的には総合比較みたいな形になるんだろうと思うんですね。アシストをこれから増やしていくという議論は当然あると思いますが、私は今申し上げたように、例えば部活とか日本の割と特別なシステムであるわけですね。ただ、多分ここにいる、ほとんどの人はそういう部活を経験して、それなりに大人になる過程で部活のよさも感じていただろうと思うんですね。

だけど、この原点に戻っていったときに、部活ってどこまでやるべきなのか。サッカーでJリーグに入るためには部活を多分やってたら、なかなか逆にJリーグに入れなかもかもしれませんね。だけど、今の人生に学生生活をするには部活が必要だとなるとすると、部活ってどの程度でやるべきなのかというようなことを私は一つ一つ積み上げていかないといかんのではないかなと思うんです。だから、例えばプリントでもプリントの量が本当にいいのかという、そういったところがまだまだ私は十分議論ができてないん

じゃないかなと。今も教育委員会とは来年度の予算、少しは議論をまだし始めたところでありまして、ドラスチックにそういう予算を徹底的に傾注して、こっちにやっていくというのはバランスとしてはどうかなというようには思ってるんです。

だから、一つ一つやはり見直しながらやっていかなければというようなところから今日の議論の中でも随所に出てきてるのかな。そういうことをちょっと踏まえながら対応していきたいなというように思っておりますが、何かありますか。

○藤原委員 さっきの部活の本質を見直すというのは、もう物すごく大事だと思うんです。そのときに部活動を頑張ってる先生が専門の自分の分野の競技をやってる人とそうでない先生がいるのを是非調べて、データで出していけたらいいなという。例えば、自分は野球はできないのに野球の顧問をしているとかサッカーができないのにしているとか、音楽でも器楽じゃないのにしてるとか、それは教育的な配慮の中で価値があることではあるんだけど、これだけ周辺のことが増えてくると非常に負担感につながるんじゃないかと思います。子どもたちの育ちで一緒に育っていこうというのも以前はあったと思うんですが、今は多分保護者の要求であるとか自分のジレンマであるとかで随分この負担軽減の中の負担に考えるところがあるんじゃないかと思うので、捉え方とともにそういうデータも欲しいなと。

もう一つ、何か予算に関係することかもしれないんだけど、学校で徴収金については今の市会計は多分学校の先生にとっては苦しいんじゃないかと思います。調査とかいろんなもので時間をかければできるようなものは、これは負担だけでも、やればできるんだけど、徴収でお金を納めてない人に持ってきてもらうとか、子どもたちの育ちでいろんなことに対応しようと思ったら、先生方、心がやはり疲れたり折れることもあるんですよね。せめてその会計のお金を集めることは市でやるとか、多分一過的には通過地点では徴収率が落ちるとかいろいろあると思うんですが、負担軽減全体から見たときには、そういうことも必要かなと思いました。

○下村中学校長会長 ちょっと部活のことで補足をさせていただきたいと。市長のほうから本質をとという話があったと思うんですが、中学校体育連盟のほうでは、とにかく目的としては広くスポーツに親しむということ、あるいはそれを通して人格形成につなげていくというのがもう発端の実態としてあります。そこに競技力の向上というのがその目的にはないんですが、いろんな団体から入ってくる、あるいは顧問の先生がそれを目指していくと。あるいは岡山市で全国大会があるから、ええ成績をおさめにゃいけん

か、そういうふうな競技力の向上という部分が入り込んでくると少しその目的がゆがんでしまうというところはあるのかなと思います。そこに大分いろんなプレッシャーを感じながらやっとなされる先生も多いということで、本質については議論はまたしていけばいいと思うんですけど、そちらに随分と左右されているというところもお知りおきをいただけたらと思います。

○市長 スポーツはいろいろな目的がありますが、そのうちの一つはやはり勝負というところがあることは、これはもう否定できない事実ですから、おっしゃることがよくわかります。

何かほかにございますでしょうか。よろしいですか。

じゃあ今日は結論という感じの会議じゃなかったんで、ただこの家庭学習の重要性和それから教員の負担軽減というのは、特に前者は岡山市の場合、ちょっと家庭学習が全国的に比べてもよくないという事実があるから、そこは改善していかなきゃなんない。それから、勤務実態をもう少し改善していかなきゃなんない。これは全国的な話でもあります。我々としても手をこまねいてるわけにはいかないというように思います。今日の意見を踏まえて、これからこの予算等々で一つ一つの整理をさせていただきたいというように思っております。

私からは以上でございます。事務局に進行を渡します。

○司会 はい、ありがとうございました。

次回の会議については、来年度ということで予定をしております。

以上で平成29年度第2回総合教育会議を閉会いたします。お疲れさまでした。